

原 著

川田貞治郎の「教育的治療学」におけるビネ知能検査の導入と役割
— 大正期のアメリカ滞在から昭和前期の藤倉学園創設後を中心として —

高野 聡子

1919（大正8）年に藤倉学園を創設した川田貞治郎は、藤倉学園創設以前の1916（大正5）～1918（大正7）年の約2年半、アメリカ合衆国でアメリカ精神薄弱施設における教育と保護の方法を習得した。彼は、H.H.ゴダードが研究部門長を務めるヴァインランド精神薄弱者施設において、ビネ知能検査の精神年齢とIQを用いた精神薄弱分類基準を習得し、それを「児童研究」に発表した。藤倉学園創設後、彼は、ビネ知能検査を実施し、精神年齢とIQを用いた精神薄弱分類基準を「教育的治療学」の体系に盛り込むこととなる。「教育的治療学」でのビネ知能検査の使用目的は、対象児の選定と精神薄弱の程度と分類であり、検査結果は、精神薄弱の知能の程度を把握する基準として用いられた。また、ビネ知能検査では把握できない知能、たとえば注意力と反応力などについては、教育的治療学の「心練」が使用された。

キー・ワード：川田貞治郎 教育的治療学 ビネ知能検査 精神薄弱 H.H.ゴダード
アメリカ合衆国

I. はじめに

本論文は、1919（大正8）年に精神薄弱児施設、藤倉学園を創設した川田貞治郎（1879～1959）が体系化した精神薄弱施設における教育と保護の方法論である「教育的治療学」と、ビネ知能検査との関連を明らかにすることを目的とする。彼の教育的治療学は、わが国で明治末期から第二次世界大戦以前に創設された精神薄弱児施設での教育と保護の方法論の代表的な業績である。

明治中期のわが国では、欧米諸国の特殊教育が紹介され、それらに範をとった特殊教育の導入が模索されていた（中野・加藤, 241-300）。欧米諸国の特殊教育を施設に取り入れるため、

欧米諸国へ留学した¹⁾他の精神薄弱児施設創設者と同じように、川田もまた、1916（大正5）～1918（大正7）年の約2年半、アメリカ合衆国に滞在し、精神薄弱者施設における教育と保護の方法と医学・心理学等を学んだ（Table 1）。

川田がアメリカ滞在中に習得したことと、それが教育的治療学形成に与えた影響については、ほとんど明らかになっていない。清水が、教育的治療学形成の支柱は、川田の約2年半にわたるアメリカ滞在（大正5 [1916]—大正7 [1918]年）であると指摘しているにすぎず（清水 [1978] 27-30）、彼のアメリカ滞在中の精神薄弱者施設の動向はもちろん、その教育的治療学形成への反映も検討されていない。

川田のアメリカ滞在中が、教育的治療学の体系を明らかにする上でなにゆえに重要であるのか

Table 1 川田貞治郎のアメリカ合衆国における滞在先とその期間

1916(大正5)年4月～ 1917(大正6)年2月	ニュージャージー州ヴァインランド精神薄弱者施設とその研究部門で精神薄弱教育の方法と実践を学ぶ*
1917(大正6)年2月～ 9月	ペンシルヴァニア大学で精神病学、病理学、心理学、脳解剖、実験心理学を学ぶ**
1917(大正6)年9月～ 1918(大正7)年10月	帰国費用を作るため、ペンシルヴァニア州立ポーク精神薄弱者施設で介護職員として勤務***

*28th Annual Report of the Training School at Vineland, New Jersey,38;29th Annual Report,45. **川田[1917c]403. ***川田[1917d]347. より引用

は、彼の滞在期間が、アメリカ精神薄弱者施設と精神薄弱研究における重要な転換期にあっていたことによるからである。その時期は第一に、精神薄弱脅威論の科学的根拠の形成とその普及、脅威論と矛盾する精神薄弱適応論の萌芽、これらと施設機能の変化、公立学校での特殊学級の設置が始まり、第二に、科学的な精神薄弱診断法と処遇の根拠としての知能検査の開発が行われたのである。

本論文は、第二の文脈と関連させつつ、川田が、アメリカ滞在中にビネ知能検査をどのように受容したのか、また、彼がビネ知能検査を教育的治療学においてどのように利用したのかについて検討する。

前者を重要視することについては、川田が滞在中のヴァインランド精神薄弱者施設が、アメリカでの知能検査開発の一大拠点であったことが理由に挙げられる。彼はアメリカ滞在中に「児童研究」でビネ知能検査に関する論文を発表しており、帰国後、藤倉学園で知能検査を実施するのである。後者に注目するのは、教育的治療学の実施が報告されている藤倉学園の事業報告書と実践記録で、精神年齢とIQを用いた精神薄弱の分類基準が報告されているからである。

なお、本論文の対象時期は、川田がアメリカに滞在した1916(大正5)～1918(大正7)年の約2年半、そして藤倉学園創設時の1919(大正8)年から、ビネ知能検査の実施が藤倉学園の事業報告書において報告される1929(昭和4)年までに設定する。

本論文は歴史的研究であり、川田がアメリカ滞在中に妻トクに宛てた書簡、藤倉学園の事業

報告書、藤倉学園の園児の絵画を収めた記録²⁾、教育的治療学の実践記録³⁾を資料として使用する。また、精神薄弱、愚鈍、怪愚、白痴、低能児等は歴史的用語として使用する。

II. 「児童研究」に発表したビネ知能検査の内容

川田は、アメリカ滞在中の1917年に、医学者、心理学者、教育学者によって「異常児」問題に関する研究・教育についての発表、情報交換、海外事情が紹介されていた「児童研究」に、「精神薄弱児ニ就キテノ智力検査」(川田 [1917a] 130-132)と題してビネ知能検査について発表した。

彼はまず、精神年齢0歳から2歳を白痴、3歳から7歳を低能児、8歳から12歳を怪愚(モロン)に分類し、各段階を上、中、下に分けた精神薄弱の分類基準(Table 2)を紹介している(川田 [1917a] 130)。

この分類基準は、1910年、ヴァインランド施設の教育心理学者で家系研究とともに世界的に著名であった、H.H.ゴダード(Goddard, Henry Herbert 1866-1957)が、精神薄弱施設長ら、専門家の団体であるアメリカ精神薄弱者研究協会(The American Association for the Study of the Feeble-Minded: AASF)⁴⁾に設置された精神薄弱分類委員会(The Committee on Classification of Feeble-minded)の委員として提案し、採用された精神薄弱の分類基準(Table 2)と同じである(Rogers[1910a]61-67; Rogers [1910b] 69-71)。

1910年頃のアメリカでは、精神薄弱の分類基準と、白痴、痴愚など程度を示す用語が、病理学者・心理学者ら定義者の数だけあり混乱が生

Table 2 川田貞治郎が「児童研究」に発表した精神薄弱分類基準

精神年齢	川田貞治郎		アメリカ精神薄弱者研究協会	
	分類名	下位分類	分類名	下位分類
未満 1歳 2歳	白痴	下	Idiots	low grade
		中		middle grade
		上		high grade
3歳 4歳 5歳 6歳 7歳	低能児	下	Imbeciles	low grade
		中		middle grade
		上		high grade
8歳 9歳 10歳 11歳 12歳	軽愚 (モロソ)	下	Morons	low grade
		中		middle grade
		上		high grade

アメリカ精神薄弱者研究協会は、low, middle, highの精神年齢を示していない。川田貞治郎(1917)精神薄弱児ニ就キテノ智力検査。児童研究, 21(6), 130-132. Rogers, A.C.(1910) Report of committee on classification of feeble-minded. *Journal of Psycho-Asthenics*. 15, 61-67. から引用

じていた (Singer, 3)。それゆえアメリカ精神薄弱者研究協会は、精神薄弱の用語を統一すること、グループ分けするために心理学的根拠を採用すること、心理学的な検査を用いて分類を決定することの3段階を経て (Rogers [1910b] 68)、精神年齢を用いた分類基準を作成したのである。

またこの頃、アメリカ精神薄弱施設長らは、精神薄弱が犯罪、売春、放浪などの反社会的な行動の原因であり、精神薄弱施設が彼らを収容し隔離すべきであると主張していた(タイオワベル, 113 - 114)。施設長らにとって、ビネ知能検査の実施と統一された精神薄弱の分類基準は、精神薄弱脅威論を数値的に裏付けるのに有効な手段でもあった。

川田は、生活年齢、精神年齢、IQの約5年間の変化を示した7事例を挙げているが、その典拠は明示していない。これらの事例は、川田が滞在していたヴァインランド施設研究部門 (Research department) の研究員E.A.ドル⁶⁾ (Doll, Edgar Arnold 1889-1968) が、1916年に施設紀要 (The Training School Bulletin) に発表した論文 (Doll, 36-41) の各事例の年齢とIQが同じであることから、川田はドルの報告を引用したと

考えられる⁶⁾。

ドルの論文に挙げられている事例は、ビネ知能検査1911年法ゴダード改訂版を、2年から5年の間隔で被検者に実施したものである。ドルは、この事例研究において、IQの値が数年経過しても一定である (すなわち知能の恒常性) から、IQの信頼性の高さを指摘している (Doll, 38-40)。

最後に川田は、IQ100を正常児の平均IQとし、精神薄弱はIQ75以下で、劣等児はIQ76から89、普通児はIQ98から103、軽愚はIQ71から80、低能児はIQ61から70と示している (Table 3)。これもまた、ドルが1916年に論文で示した分類に類似している。ドルは、IQを基準にした精神薄弱の分類基準が多数あるために、統一化を試みて考察したのであった (Table 4)。

このように川田は、「児童研究」において、精神年齢とIQを用いた2種類の精神薄弱分類基準を発表したのである。これらの基準は、彼が滞在先のヴァインランド施設の研究部長ゴダードと、研究員ドルから引用したものである。それゆえ、川田が導入したビネ知能検査は、アメリカ版のビネ知能検査⁷⁾の中でも、ヴァインランド施設の研究部が発表した知能検査であった

Table 3 川田貞治郎が「児童研究」に発表したIQを用いた分類基準

普通児	98~103
劣等児	76~89
精神薄弱児	75以下
軽愚	71~80
低能児	61~70
白痴	25~44

100を普通児の平均的智力とする

川田貞治郎(1917)精神薄弱児ニ就キテノ智力検査。児童研究, 21(6), 130-132.

Table 4 E.A.ドルによるIQを用いた分類基準

Class	I.Q	Class
Feeble-minded	Under 75	Defective
Backward	75-89	Inferior
Dull Normal	90-97	Normal
Normal	98-102	
Bright Normal	103-110	
Precocious	111-125	Superior
Talented	over 125	Brilliant

Doll, E.A. (1916) Note on the "Intelligence Quotient". *The Training School Bulletin*, 13-, 36-41.

ことがわかる。

しかし川田は、ヴァインランド施設がこれらの精神薄弱分類基準を、どのような意図で用いたのかについては、「児童研究」では言及しておらず、彼の他の論文でもこの点について触れていない。また、彼が精神薄弱分類基準を、どのような人を対象にして、何を目的として使用しようとしたかについても明らかではない。これらについては、帰国後の藤倉学園でのビネ知能検査の実施を待たなくてはならない。

なお、大正期のわが国では、欧米諸国からビネ知能検査の改訂版が紹介され⁸⁾、殊にアメリカ版ビネ知能検査は、心理学者久保良英(1883-1942)⁹⁾が他者に先駆けて導入するなど、日本改訂版を作成する傾向の中にあつた。しかし川田は、「児童研究」にビネ知能検査を発表するものの、アメリカ滞在中、そして帰国後の藤倉学園でも日本版を作ることはなかった。彼のアメリカ滞在の目的は、教育的治療学の形成で

あり、ビネ知能検査を教育的治療学の体系において、実施することはあっても、日本版を作成することではなかったのである。

Ⅲ. 藤倉学園でのビネ知能検査法の実施と精神年齢・IQを用いた分類基準

1. 精神年齢を用いた精神薄弱分類基準の実施

川田は、1919(大正8)年、伊豆大島に創設した藤倉学園の教育方針の中で、精神薄弱の分類基準を提示している。それは、精神年齢1歳から2歳を白痴、3歳から7歳を痴愚・低能児、8歳から12歳を軽愚とし、さらに白痴、痴愚・低能児、軽愚のそれらを上、中、下の程度に分類したものである(Table 5, 財団法人藤倉学園[1919] 58-59)。これは、精神年齢0歳を除外していることを除けば、アメリカ滞在中に彼が、「児童研究」に紹介したゴダードの精神薄弱分類基準と同じである。

そして川田は、さらにゴダードの分類基準に、各精神年齢の特性を項目として追加し、例えば、精神年齢8歳については、「お使ひ¹⁰⁾軽い仕事寝床をしく」というように具体的な行動を示している(Table 5, 財団法人藤倉学園[1920] 58-59)。彼は、精神年齢を用いた精神薄弱の分類基準を、藤倉学園の園児を対象にして、精神薄弱の程度を明らかにするために用いようとしていたのである。

では川田は、実際にこの精神薄弱の分類基準を、藤倉学園において使用したのだろうか。彼は、大正10年度藤倉学園事業報告の「治療教育と其の経過」において、園児の精神薄弱の程度を「年齢は14歳7ヶ月にて入園され智力年齢は6歳と8ヶ月で---」(財団法人藤倉学園[1921] 109)というように、精神年齢を用いて測定(数値化)し、入園時の実態を記述している。

川田は、アメリカで学んだ精神年齢を用いた精神薄弱分類基準に、精神年齢の指標となる特性を項目として追加し、それを実際に藤倉学園の園児に対して精神薄弱を分類するために使用したのである。

Table 5 1918(大正9)年、藤倉学園の教育方針において示された精神薄弱分類基準

精神	一歳以上 二歳まで	一歳以下	(a) 世話を要せねばらぬ者 (b) 歩行し得ぬ者 (c) 有為的幾分の熟視	下	白痴
		一歳	(a) 身体を養ふ事の出来る者 (b) 何でも食べる	中	
		二歳	(a) ものの区別をして食べる	上	
薄弱	三歳より 七歳まで	三歳	(a) 少し遊びをする (b) 仕事をしない	下	痴愚 低能
		四歳	仕事をしようとする		
		五歳	極単純なる仕事	中	
		六歳	(a) 多少継続したる仕事をし得る (b) お茶碗を洗ふこと	上	
者	八歳より 十二歳まで	七歳	家中内の御使ひする(ちりをとつたりはきさ うちをする)		
		八歳	お使ひ軽い仕事寝床をしく	下	怪愚
		九歳	重いものの仕事(みがき事繕ひこと)		
		十歳	煉瓦をつむ、浴室の世話、建物に於ける手伝	中	
十一歳	時々監督する丈で可なり複雑な仕事	上			
		十二歳	機械の使用動物養護但し監視を要す計画を立つ る不可能		

財団法人藤倉学園(1919)大正9年度年報、川田仁子(編)(1989)川田貞治郎教育的治療学全集IV, 58-59, 文化出版局より引用

2. 園児の絵画記録に記録されたIQとIQを用いた精神薄弱分類基準

1927(昭和2)年の記録である「発達心理学上より見たる図画の進歩階程を示せる参考資料」は、園児がクレヨンで白画用紙に描いた絵画を収めたものである。その表紙の裏には、園児の発達を示すため、絵画の記録よりも数年前に検査した園児の精神年齢、生活年齢、IQが記録されている。

例えば、ある園児(第10号児)の記録では、1921(大正10)年時の園児の「Mental age 5.08, chronological 7.10, IQ 71.」と精神年齢、生活年齢、IQが算出されており、さらに「精神薄弱として痴愚であり」と、精神薄弱の程度も示している。このように、川田は少なくとも藤倉学園創設3年後には、園児に対してビネ知能検査を実施し、IQを算出していたことがわかる。

1929(昭和4)年になると、「精神薄弱児ノ諸問題」の小題目「如何にして其の智能を知る事が出来るか」の中で、川田は、精神年齢とは「精

神発達程度」を示し、生活年齢とは、「身体的進歩の程度」を示すものであり、「健康児と精神薄弱児とを分類」することにおいて有用な指標であると述べている(財団法人藤倉学園[1929] 61-62)。そしてIQの計算方法も説明している(財団法人藤倉学園[1929] 61-62)。

さらに川田は、IQを「智能指数」と邦訳し、「精神と身体との進歩発育の相関を知る事、即数量に依り人為的ではあるが比較関係を認められる」ものであると説明している(財団法人藤倉学園[1929] 61-62)。

そして川田は、IQによる精神薄弱の分類基準も示している。その分類基準は、IQ75以下は精神薄弱、IQ25から50までを痴愚、IQ25以下は白痴としている(財団法人藤倉学園[1929] 62)。この基準は、彼が「児童研究」に発表した前記の分類基準とは、基準となるIQと、IQ25から50までの痴愚の表記が異なる¹⁰⁾。

このように川田は、藤倉学園でビネ知能検査を実施し、その結果から、精神年齢とIQを用い

て精神薄弱の程度を区切って分類をしていたのである。では、これらの分類基準は、教育的治療学においてどのような役割を担っていたのであろうか。

IV. 教育的治療学における精神年齢とIQを用いた精神薄弱分類基準の役割

1. 精神薄弱の発達の制約と教育的治療学の有効性

川田は、アメリカ滞在中に妻トクに宛てた書簡と、藤倉学園の教育方針で教育を、普通教育、補助学級、治療教育の3つの範囲に区分して、それぞれの対象児について述べている（川田 [1918] 476-478；財団法人藤倉学園 [1920] 56-58；川田 [1926] 57-70）。

まず、普通教育の対象は、小学校において教育を受ける普通児を指し、補助学級の対象は、普通児と同様の取り扱いを受けているが、普通教育と治療教育の中間にいる劣等児であるとしている。そして治療教育の対象は、精神薄弱であると述べている（財団法人藤倉学園 [1919] 56-58）。川田は教育的治療学を、治療教育と言った場合もあるため（西谷, 61）、ここで言う治療教育とは、教育的治療学を指すと考えられる。彼は、教育的治療学の対象を、精神薄弱に設定していたのであり、教育的治療学の対象であるか否かを判別するために知能検査の実施は必要であった。

また、川田は白痴、痴愚、軽愚は、「智力」の量の多少が異なっているので、教育的治療学は、子どもの「智力」の量に応じて、実施する方法と内容を異なるようにしなければならない（川田 [1926] 58）と考えており、ビネ知能検査の検査結果から、精神年齢とIQを算出し、それらを用いた精神薄弱の分類基準によって、実施すべき教育的治療学の方法を選択しようとしたのである。

さらに川田は以下のように、精神薄弱の発達の制約について言及しつつも、精神薄弱への教育の有効性について述べている。彼は精神薄弱の制約を、つぎのように明言する。精神薄弱と

は、「生活年齢が進むに従ってその精神的進歩が制限され段々低下して行く」（財団法人藤倉学園 [1929] 62）。しかし同時に、教育の有効性をも確認する。精神薄弱者は「それでも教育的治療さへ為ればその精神年齢と生活年齢との差は減少され、両者は相接近して来る」または、「智能を高める為に教育的に治療するならばその教育的効果は極めて良好なるを得るようになります」（財団法人藤倉学園 [1929] 62）と言及しており、精神薄弱と診断された園児に対して、教育的治療学こそが有効な方法であると強調する。

川田は、教育的治療学を実施して得られた教育的な効果を事業報告で次のように報告している。ある園児（第11号児）は、5年前の入所時に生活年齢が8年10ヶ月で、精神年齢は6年であった。しかし5年後には、「もともと養育院から貰ひうけた子供で来た頃は低能でしたが苦心した結果今日では智能は十二才までに進歩しました。」（財団法人藤倉学園 [1924] 278-279）と報告している。そして川田は、もし教育的治療学が実施されなければ、「――私生児である上に周囲の環境によって慥に不良少年になってしまったことと推察されます。」（財団法人藤倉学園 [1924] 278-279）と報告し、教育的治療学の有効性を示唆しているのである。

2. ビネ知能検査で把握できない精神薄弱の状態を診断するための「心練」

「心練」は、教育的治療学の教育・訓練方法であり、藤倉学園では午前中の学課の時間を中心にして行われた（高野ほか, 166）。ここでは、心練の中でも「直観訓練」と「豆袋」を取り上げる。

直観訓練の実施方法は、第一直観教具（80×80×40mmの木製の積み木）を3個用意し、精神薄弱児が、指導者が並べた第一直観教具を、模倣して並べる（川田ら, 17-20）。指導者は、精神薄弱児の並べた第一直観教具の位置、手順、教具のつかみ方などを観察記録し、視覚や手の筋力などの機能障害と注意力の障害を診断した（教授ノート4¹¹⁾；高野ほか, 171-172）。

次に、豆袋の実施方法は、指導者が、200×140mmの赤または白のさらし布に、小豆を140～180gの重さになるよう入れた豆袋をまき散らし、精神薄弱児に対して、赤または白の豆袋を、指導者の所へ運ぶよう指示する（川田ら、15）。指導者は、対象児が豆袋を運ぶ時間とその間の行動を観察記録し、精神薄弱児の反応力を診断した（川田ら、15；教授ノート2；高野ほか、170-171）。

このようにして指導者は、直観訓練や豆袋などの心練を精神薄弱児に実施し、その観察記録と結果から、個々の精神薄弱児の機能障害、注意力、反応を診断した。なお、指導者は、直観訓練や豆袋の実施によって得られた結果から、一人ひとりの精神薄弱児が必要とする教育を、心練項目から選択し、精神薄弱の程度に応じて個別的・集団的方法を用いて実践していたのである（高野ほか、168-172）。

つまり川田は、園児の精神薄弱の程度を精神年齢とIQによる分類基準から解釈し、それを参考にしながら、ビネ知能検査では把握できない機能障害、注意力、反応などについて、彼が考案した心練、とりわけ心練の中でも直観訓練と豆袋を用いて診断したのである。

V. 結語

教育的治療学は、藤倉学園創設後に体系化されるが、その形成はすでに藤倉学園創設前のアメリカ滞在期を含めた10年前から始まっており、形成過程の支柱は、ビネ知能検査が習得されたアメリカ滞在での精神薄弱児教育と保護の方法の習得の時期にある。

川田が習得したビネ知能検査は、欧米諸国でビネ知能検査が改訂された中でも、アメリカが滞在先であったこと、滞在先の精神薄弱施設にゴダードがいたこと、滞在期はアメリカ精神薄弱者研究協会がビネ知能検査を用いて精神薄弱分類基準を作成した時期であった等の状況下にあったことから、アメリカ改訂版であった。

教育的治療学でのビネ知能検査の使用目的は、対象児を選定すること、精神薄弱の程度を診断

し分類することであり、検査結果によって、園児の精神薄弱の程度が把握された。しかし、ビネ知能検査の結果だけでは、精神薄弱の程度が明らかになるだけで、教育的アプローチを計画するには十分ではなかった。そのため、川田は教育的治療学の心練（直観訓練と豆袋）、すなわち教具を用いた検査を実施し、精神薄弱児の機能障害、注意力、反応について診断したのである。

川田はビネ知能検査を実施する中で、精神薄弱の発達の制約を認めているが、精神薄弱児への教育と訓練、すなわち教育的治療学の有効性を指摘している。アメリカの精神薄弱施設長、ゴダードらが知能の恒常性をどのように考え、それを川田がどのように理解したか検討することにより、教育的治療学における精神薄弱の発達の制約について明らかになるであろう。今後の課題としたい。

なお、ビネ知能検査は心理学的アプローチであるが、川田はペンシルヴァニア大学で、病理学の講義を受講しており、病理学的な診断方法が教育的治療学にあたえた影響についても検討することが必要である。

註

- 1) 石井亮一（1867-1937）は、1896（明治29）4月18日～12月22日と1898（明治31）年8月～1999（明治32）年1月の合計2回アメリカへ渡った。三田谷啓（1882-1962）は、1911（明治44）～1914（大正3）年ドイツへ留学した。川田貞治郎は、1916（大正5）～1918（大正7）年アメリカに滞在した。
- 2) 園児の絵画記録とは、「発達心理学上より見たる図画の進歩階程を示せる参考資料」である。現在この記録は、社会福祉法人伊豆大島藤倉学園のパパ記念室に保存されている。
- 3) 教育的治療学での教育方法である「心練」の実践記録（「教授ノート」39冊と「心練ノート」4冊）と、園児の観察記録（「育成日誌」1冊）が、現在社会福祉法人藤倉学園本部（東京都中央区京橋）に保存されている。
- 4) 前者は、1876年設立のThe Association of

- Medical Officers of American Institutions for Idiotic and Feeble-Minded Persons:AMO。1933年、The American Association on Mental Deficiency:AAMDに改称。
- 5) ドルは心理学者で、1953年にヴァインランド社会成熟度尺度(The Measurement of Social Competence: a Manual for the Vineland Social Maturity scale)を発表した人物である。彼は、川田がヴァインランド精神薄弱者施設滞在中に、同施設研究部の研究員として勤務していた。
- 6) 川田の論文では、ドルの論文と教力所データの値が異なる箇所がある。例えば、0を9と記している。
- 7) この時期のアメリカ改訂版ビネ知能検査には、1911年、ゴダードのビネシモン知能検査(The Binet-Simon Measuring Scale for Intelligence, Goddard [1911])と、1916年、L. M. ターマン(Terman, Lewis Madison 1877-1956)のスタンフォードビネ知能検査(The Stanford Revision and Extension of the Binet-Simon Intelligence Scale, Terman [1919])がある。
- 8) 三田谷治療教育院の創設者、三田谷啓(1882-1962)が、1915(大正4)年、ドイツのポーベルダッハ版ビネ知能検査を日本版に改訂し、「学齡児童力検査」を発表した(中村[1985] 225)。
- 9) 久保は知能検査の改訂前に1913(大正2)年~1916(大正5)年まで、スカラシップを取得し、東京市の囑託による教育事情視察もかねてアメリカ合衆国のクラーク大学へ留学し、1915(大正4)年哲学博士を取得した(鈴木, 2-3)。留学中彼は、ヴァインランド精神薄弱者施設を川田貞治郎の案内で視察しており(川田[1916a] 135)、ゴダードの精神薄弱の分類と家系研究を「心理学研究」に紹介している(久保[1916] 94-99)。彼は、1918年、1919年、1920年に改訂版を発表している(久保1918 ; 1919 ; 1920)。
- 10) 1917年の「児童研究」で川田は、「痴愚・低能児」と表記していたが、1929年の論文にお

いて「痴愚」と表記している。

- 11) 教授ノート4は、現在、社会福祉法人藤倉学園に保存されており、本論文では、1929(昭和4)年に記録されたBanG(対象児の仮名)に関する記録を分析した。

引用・参考文献

- Chapman, P.D. (1988) *School as sorters: Lewis M.Terman, Applied psychology, and the intelligence testing movement, 1890-1930*. New York University Press, New York and London. 菅田洋一郎監訳(1995) 知能検査の開発と選別システムの功罪—応用心理学と学校教育—, 晃洋書房。
- Doll, E.A. (1916) Note on the "Intelligence Quotient". *The Training School Bulletin*, 13, 36-41.
- Doll, E.A. (1953) *The measurement of social competence: a manual for the Vineland social maturity scale*. Educational Test Bureau, Minneapolis.
- Goddard, H.H. (1910) Four hundred feeble-minded children classified by the Binet method. *Journal of Psycho-Asthenics*, 15, 17-30.
- Goddard, H.H. (1911) The Binet-Simon Measuring Scale for Intelligence. The Training School at Vineland New Jersey.
- Kamin, L.J (1974) *The science and politics of I.Q.* Halsted Press, New York. 岩井勇児(1977) IQの科学と政治. 黎明書房。
- 川田仁子・川田はな・馬場均子・杉本正巳・福地光・岩下よし子・新井明子(2003) 教育的治療学の手引き心練ノート. 社会福祉法人藤倉学園。
- 川田貞治郎(1916a) 大正5年7月10日在米書簡. 川田仁子(編)(1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅲ, 134-140. 文化出版局。
- 川田貞治郎(1916b) 大正5年9月5日在米書簡. 川田仁子(編)(1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅲ, 168-177. 文化出版局。
- 川田貞治郎(1917a) 精神薄弱児二就キテノ智力検査. *児童研究*, 21 (6), 130-132.
- 川田貞治郎(1917b) 大正6年1月9日在米書簡抄録. 川田仁子(編)(1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅲ, 248-257. 文化出版局。
- 川田貞治郎(1917c) 大正6年3月4日在米書簡抄録. 川田仁子(編)(1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅲ, 403-406. 文化出版局。

- 川田貞治郎 (1917d) 大正6年9月18日在米書簡. 川田仁子 (編) (1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅲ, 347-354. 文化出版局.
- 川田貞治郎 (1918) 大正7年5月20日在米書簡. 川田仁子 (編) (1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅲ, 476-480. 文化出版局.
- 川田貞治郎 (1926) 精神薄弱児の治療教育 (一). 教育論叢, 15 (3), 57-70.
- 久保良英 (1916) ヴァインランド低能児学校参観記. 心理学研究, 60, 92-100.
- 久保良英 (1918) 小学児童の智能査定の研究. 児童研究所紀要, 1, 1-64.
- 久保良英 (1919) 増訂せる智能検査. 児童研究所紀要, 3, 291-318.
- 久保良英 (1920) 増訂智能検査. 児童研究所紀要, 5, 1-50.
- 茂木俊彦・高橋智・平田勝政 (1988) わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究 I - 雑誌『児童研究』の分析を中心に - 教育科学研究, 6, 77-106.
- 中村勝二 (1985) 知能検査の導入と改訂. 津曲裕次 (編), 障害者教育史. 川島書店, 223-227.
- 中村満紀男 (2004) 1910年代までの精神薄弱増殖防止としての断種—精神薄弱者問題の国家問題への昇格. 中村満紀男 (編) 優生学と障害者. 明石書店, 75-148.
- 中野善達・加藤康昭 (1991) わが国特殊教育の成立. 東峰書房.
- 西谷三四郎 (1981) 川田貞治郎と教育的治療学. 文教大学教育学部紀要, 15, 58-66.
- 松原達哉編 (1980) 現代教育心理学知能. 日本文化科学社.
- Rogers, A.C. (1910a) Report of committee on classification of feeble-minded. *Journal of Psycho-Asthenics*, 15, 61-67.
- Rogers, A.C. (1910b) The new classification (tentative) of the feeble-minded. *Journal of Psycho-Asthenics*, 15, 68-71.
- 清水寛 (1978) 川田貞治郎の「教育的治療」の思想と方法—「教育的治療法」概念の形成過程を中心に—. 障害者問題研究, 13(1), 24-40.
- Singer, D. (1910) The classification of mental defectives. *Journal of Psycho-Asthenics*, 15, 3-16.
- 鈴木朋子 (2003) 久保良英によるビネ式知能検査の改訂. 心理学史・心理学論, 5, 1-13.
- 高野聡子・松矢勝宏・中村満紀男 (2004) 川田貞治郎の「心練」の実態に関する研究—戦前の実践事例の検討を通して—. 心身障害学研究, 28, 165-174.
- Terman, L. M. (1919) *The measurement of intelligence an explanation of and a complete guide for the use of the Stanford revision and extension of the Binet-Simon intelligence scale*. Complete Press, West Norwood, London, England.
- The Training School at Vineland, New Jersey. For the Year of 1916 (28th) —1917 (29th), AR.of.
- Trent, Jr., James W. (1995) *Inventing the Feeble Mind: A history of mental retardation in the United States*. University of California Press, Berkeley. 清水貞夫他監訳 (1997) 「精神薄弱」の誕生と変貌: アメリカにおける精神遅滞の歴史 (下), 学苑社.
- Tyor, P.L.&Bell, L.V. (1984) *Caring for the retarded in America*. Greenwood Press, Westport, Conn. 清水貞夫他監訳 (1988) 精神薄弱者とコミュニティ—その歴史—. 相川書房.
- 山下垣男 (1973) わが国における戦前のテストの歴史. 臨床心理学研究, 10, 65-77.
- 財団法人藤倉学園 (1920) 大正9年度年報. 川田仁子 (編) (1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅳ, 21-84. 文化出版局.
- 財団法人藤倉学園 (1921) 大正10年度年報. 川田仁子 (編) (1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅳ, 109-151. 文化出版局.
- 財団法人藤倉学園 (1924) 大正13年度年報. 川田仁子 (編) (1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅳ, 265-343. 文化出版局.
- 財団法人藤倉学園教育的治療学研究室 (1929) 精神弱児ノ諸問題. 川田仁子 (編) (1989) 川田貞治郎教育的治療学全集Ⅱ, 58-91. 文化出版局.
— 2004. 8. 31 受稿、2004. 12. 14 受理 —

**The Way of Introduction and Use of the "Binet Intelligence Scale"
on Teijiro Kawada's "Educational Therapy"
for Individuals with Mental Retardation**

Satoko TAKANO

In 1919, Teijiro Kawada founded the Fujikura Home and School for the feeble-minded children. He stayed in United States of America from 1916 to 1918 in order to study the education and treatment in the institution for the feeble-minded children. From 1916 to 1917, he stayed at the Training School at Vineland, New Jersey which was the institution for the feeble-minded children and Henry Herbert Goddard, a psychologist nation-widely famous for "The Kallikak Family", was the chief of the research department. Kawada studied the "Binet intelligence scale" and the diagnosis and classification of the feeble-minded by the mental age or the intelligence quotient. He published a paper about the classification of the feeble-minded by the mental age or the intelligence quotient at the "Jido Kenkyu" journal in 1917, but he did not use it until the Fujikura Home and School was established. When the Fujikura Home and School began, he examined the children into diagnosis and classification of the feeble-minded. He systematized his "Educational Therapy" as the method for the feeble-minded, so the classification of the feeble-minded was indispensable to it. Moreover, he practiced "Shin-ren" in order to understand the intellectual abilities of children who were diagnosed as the feeble-minded.

Key Words : Teijiro Kawada, "Educational Therapy", "Binet Intelligence Scale", "Feeble - mind", Henry Herbert Goddard, United States of America